

1930 年代初頭の日本では、米国市場の要求を踏まえて靴下用極細優等糸の生産を確立させることが急務であったが、そのためには原料繭の改善と共に多条繰糸機の導入が必要であった。

郡是製糸においても、一代交雑種の研究開発とともに多条繰糸機の導入を図った。そして本社では市場の動向を踏まえつつ生産量や目的糸格を設定し、各工場ではそれに対応して生糸生産の在り方を調整していったが、品質と生産性をともに高めることは、決して容易ではなかった。

長井工場の実態を見た場合、多条繰糸機が導入された当初は、生糸品質の向上が最優先課題とされており、同工場で生産された生糸は最高級の品質を実現している。この時期において、繰糸工女は品位の維持を第一に据えながら繰糸技術を向上させ得たが、繭品質や繰糸法なども影響して、労働生産性と原料生産性は相反する傾向を示していた。この点を踏まえ同工場では、労働生産性を抑えて原料生産性を向上させることを方針として掲げ、実際にその具現化が図られた。

その後 1930 年代後半に至ると、本社の方針転換を踏まえ、同工場でも低位格の割合を増加させるなどして目的糸格の適正化を図り、むしろ生産性を高めるよう生糸生産の方針を転換した。そして同工場では、新たな原料繭や新たな繰糸機械の導入を図ったこともあって、より一層効率的な生糸生産形態が実現した。そのことは原料生産性のみならず労働生産性の向上ももたらすこととなり、同工場の一層の収益拡大につながっていったのである。